落花情談

春風日記

松村春輔著

二篇

上

櫻雨園主人著
松齋吟光畫

落華清談 春風日記

二編
二冊

東京 二書房合梓

春風日記二編自序

情を人の為ならずと云ふ言葉の稍く遺きて自ら励む意の出来る世といふ。故人の教へは。世の理なれど。弄ぶ人情を解せざる。野暮な学者は迂陳辞に酔おぼれて富る人情を。詳も見ゆる男女の中子。筆まにいて描て懲まる優しさ花よ選むも。浮ち偶ておなじ岩川の水より清く心の底を見抜く眼差り玉に盃。そゝぬけ男と

者四の法師が。蔵視もて人を弾念く。去ぐ
情が化と成り。返て是が幸ひとなるを
悔き者の何りきまるを。彼太田垣蓮月尼が
痛のきを忍人の使ふきを情のを

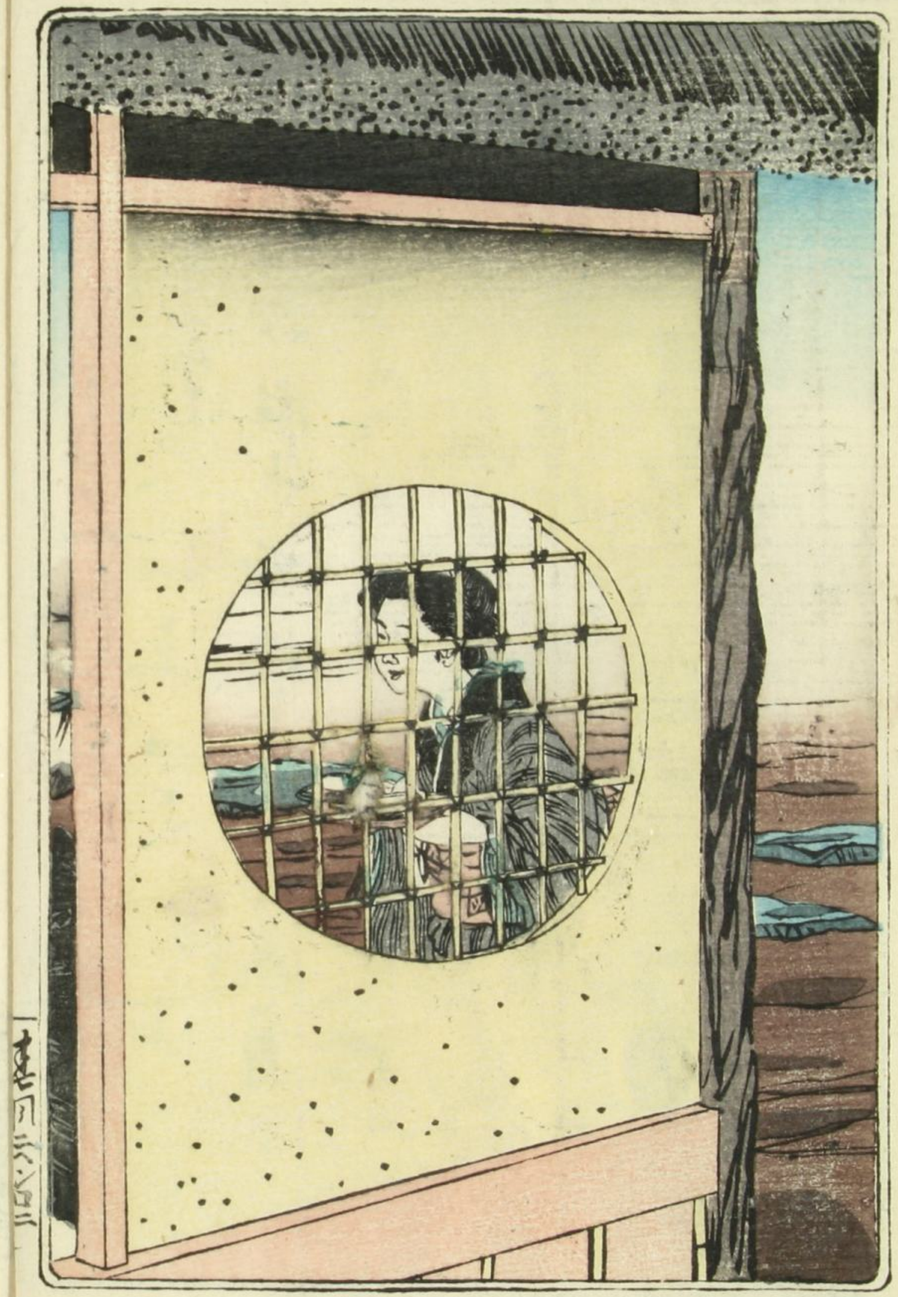
知るる風雅と月花の花の志ゆ
結る。ゆゆしを餐て人
情を。ゆゆしき界は至りぬ色〻。春風
月花を強更よ。ゆゆしを情をきき交る柳
佐々の中行を。汲んでも茶を渇きなる

作者を固より人情を知ずゆ能をあく
事一きのを。

于時明治十有四年第五月
十日伊のまり二日桜の園中狂
卯の雪初雪を尽きのふ
ゆめ亀時鳥の音信をきく〻て

桜園山人春補題并書

根山中
行あるの
あり



是もまさむる男う
都鳥
精

春のゆかた
はつかし
きつめて
花鳥と
おなじ
春の月
松村

落花流水

春風日記二編巻之上

東都　松村櫻兩戯著

第五章

娘小松子代も八子世も色かえぬ緑を見てゐる位
吉町碁の彩色の中程に日向も南を求うけなる
格子形りの一搗潜りて江戸の格子戸も素因乃
松乃流ひ出し跳迎みを慶き艶流の例を細かき
下駄箱ゆり門乃形容た極言の様子を変と見分

ねど裏にかけし表札こそ清元延寿太郎と記せしハ
云までも知られし清元の女師匠の住居なり折
柄ら表に入り来るを家も此方地の金屏ふく漏
り歌妓のお嬢なり静に上り口乃様子を窺へ婦
さん今日をべオヤお嬢さんうマアおあがりなさ
しのくまく子供衆の稽古をしてゐへ今やつと
一段落ゝ変ざよべオヤさうゝ佐藤のお稽古そえ
て居ゝさん面倒だらうと思ふ延へ十二例で思ふ
やうぢやアなひよ能く覚へて居ると思ふ楽
しみかるうふぶ覚えるの悪いのハやア困難の
だうて此書を云ふと更ツ切り来るひのあんぞ
ぶ行るから行しろ高法だと思ふて楽しみに
らるひこのら書よ魂魄家よるるよ一人婦さん
若毎アハ先刻水天宮さまへお参さ出かけれん
ざゞ魂ゝ又道寄をしゝく帰て居るだらう
よ動しく冷るまのちやアなひよ亂来ざらへ婦

さんを素ふ義やまゝいよ私も那ふ意思さんが
ゆゝいを延ばし寝ゝくいろく時〳〵悪病ふんぞを謂ひ
出ゝく関雑ふを時をかりハを個ゞ能ひと思ふ
やうぎを変でも紙の紙ふ袴へらるひるふんぞ
のいのく時い穢ともを該合とやらで動〳〵ハ使り
にかるかく悪病後のるハ又いつもの十八歳ぎ
と当ふひ振りをしてさんへ居りやゝお絵を愛ひ出ぎ
をやうふ事がいるるよおく〳〵べだらら義まゝいと云

ふのぎる延へオヤく隙り蒼手ゞ歳をぎて煙多も吸けふ
ひのぎよを云ひすぎのら煙草を沈ぎ吸ひ能くふ
るを濃せを延へオヤいりゞくろう婦さん最低時ざろ
うれ延へアン屠さ二時低かをんぎろうよ延へそれ
ぢやアを油と書さつて大丈夫ぎうら狂だゝて
お長ふ延へ動ぞ濃を当紙ひふさひまゝ〳〵チツト情夫
ふ呼ゝでも為てふ意地ふさひふ沈ふ悪ふさうの
ぢら変く遣るから延へオヤく大屠ふ口をぎよふ沈よ

つかうまるしおにまらあのうまら閉ひく密が
ひとおゑひのうねへあく唯ぢやア密ぐる品とひ
へを密しぐ付くぐろうへあこ密きつく落るう
らねへ園雑ねへ迷ふおを怠慢のおあきと出る
から何をさう惜って主らうへあ現報すぐるねへ
何でも婦さんの好ふ為ことを太やうちやアあひうへ
まぐあうと菓ふい独につうへて悪しおけ新ハ
お稽ぐくちくなつて迎るしあ能うあう

ひしあうへアあおまぐ稽うあ
ひよ二人ふへをもぐやアチョット一猪口始めるう
て浪花へでもさう云つて方ぐ能ひねへ去
きめるとおあ酒ハけるうう宜としてへ彼ふ粧む
くぐなひねへ今に雅うを通るぐらう島の
様おを新しい細目に用て新と島うら見てるあら
私ぐ甘く彼をさやてる智恵をおを目ぐ越まるうと
ちつふへ同じ新恵なる歌妓屋の豆妓ぐ裏を

をるを呼びとめて表へちやん〳〵へお師匠さん
今日は新宅へかうおいでなさいまして
お祝みに参りましたお稽古は明日からお
いまし〳〵オヤさう明日はまた
に参のうへ大坂町の糸屋へこの糸を売ふまね
りますよ〳〵支ぢやアまたいちやん（チヨイト浪花やへ寄
てお呉なアイ〳〵子お刺身と二人前お師
匠さんの家へよろしくてお呉なさい

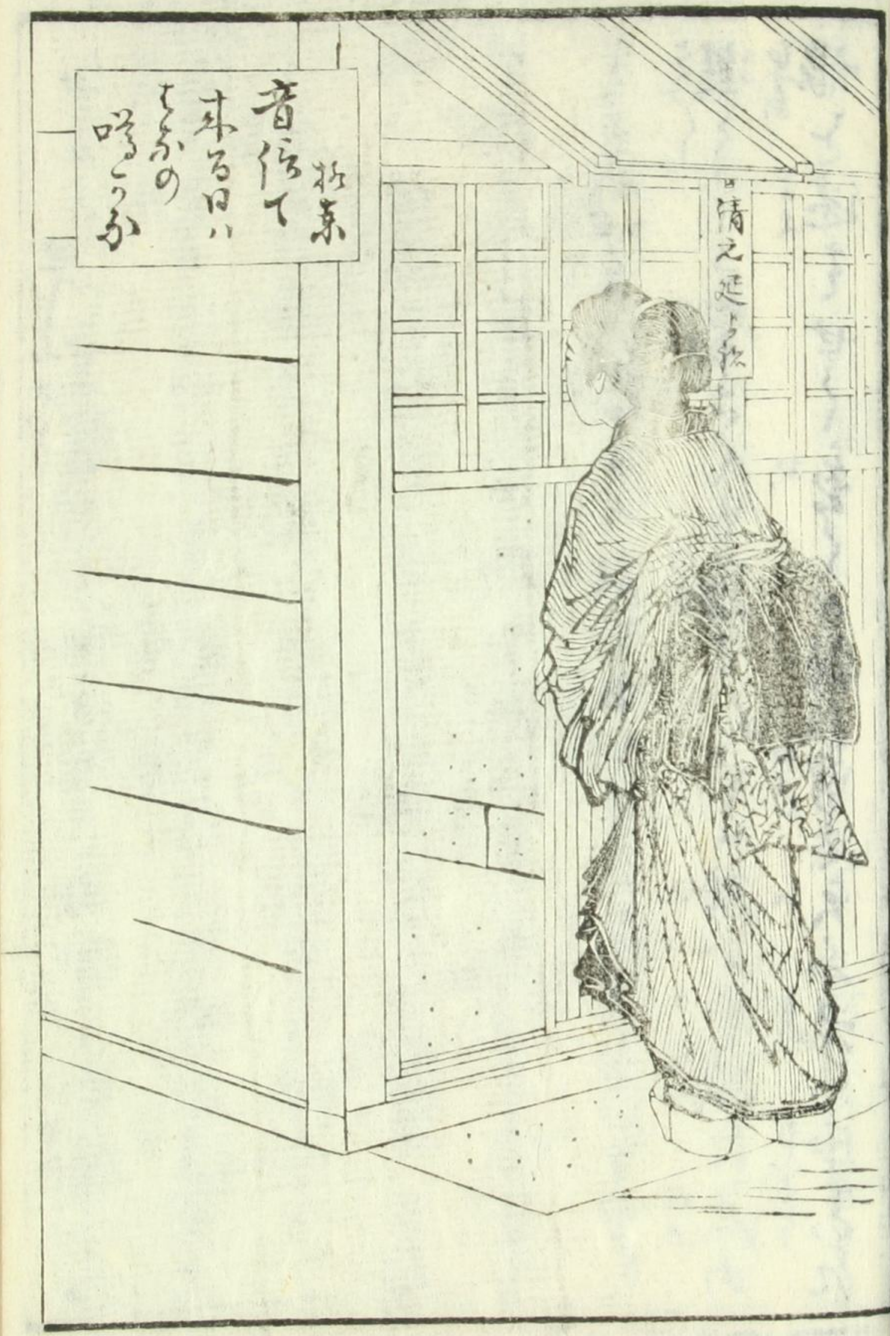
と云て頂戴よ〳〵アイもやくと云うくまもなく外
へとびりのく〳〵延られは嬉ひながら〳〵稽古だと
思つく云ながら稽古を煙ぐるとんざか
ら一部の姉さんふかうくと愛で調るうちに合
ひ頼敬で迎るよ〳〵見えがはるよ那年ぢぢ
やア金程へ多ひのさ姉さんまでも有に遠ひあれ
よ〳〵アヽ西宮にそんなかの物さ時にお祝の仕度をお
やうと見まり新大神の宮を詣まあどるるうち

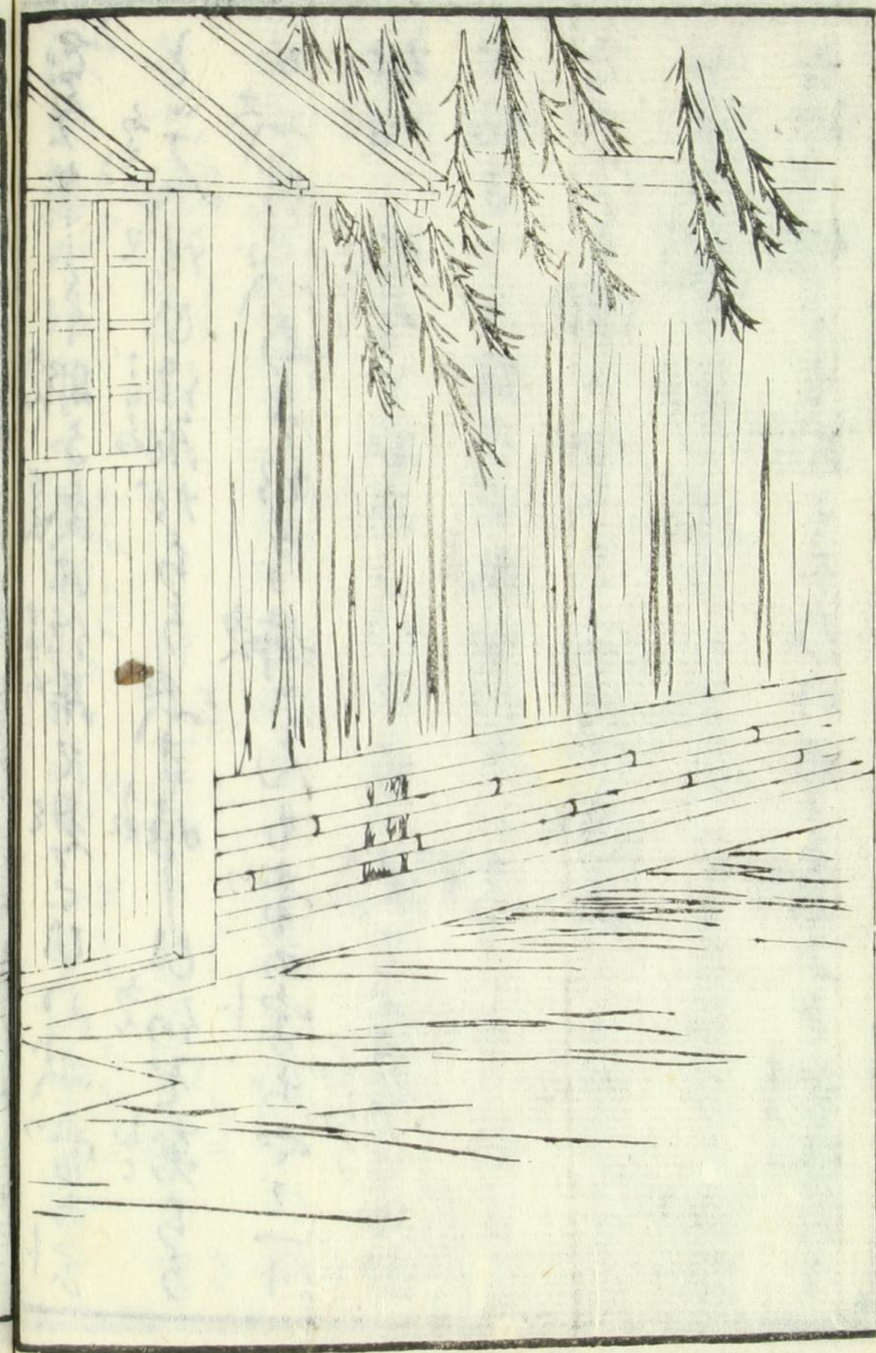
徳へ[illegible]の者も来りしうべ二個ハ盗の為ろうと
言ゐなら咄そうとさつしまへ酒事のさまと妻
〜祀さんにも還つく清流の始げとあるべる
り〜サア小雨さん何ひまるやう更衣を頂きあぐ
ら動をヤ小咄しと言ゐいぢやア職作考ぶと云ヤア
仕ゐひゝ相撲の後りいハれっうあのうれん
おまんの心を動が届ゝ有ひやうぢやア堂を撞
丈け換ざアわへ手紙でもあんしまら解く分ろう

ぢやアゐいろさへア出間人を形んでも勇ひゐるで
ゐうで揚子ゐ知見ゐひゝ猫者のを所まで車
で結て寝と言葉変屋さんふを紙を拾せく出
て見ると落ゐると見ても越て来まの
て今ぢやア逆つて方ゐ作屋でも実に驚ゐしさア
オヤ〜更ぢやア丈夫ぢつてゐへ考驚も無四つて
ちゝ小へまぐ弱魂して来小ゐらと考ふと車夫
さんゐ実に弱しひうら手方のお移婚成ての

さ先を駆くやぶ〳〵と向りまあうと云ふのう
手間人力車の中に居ッても居らまとあひうち那の
そまと行しろ云つさッケ車〻嘗まを亭の家で居金セ
て居ると何さう極りが悪ひやうぐうら一個で一ト
口喜ぐ居つ〳〵居ると姉さん〳〵ア、根岸の最寄
ぢやア嘗を亭へ能いよ私も二三度お使ひの帰
まで往さるもいつ〳〵ッけ先者も角も田舎の者
らく面白ぐいつ〳〵お茶氣で能い一生の中あやア

どうし〳〵那方変に往居て見てひい〳〵常の字
と二人淫ひ往居ならう迚〳〵オヤ姉〳〵ひ何で寒らう
ろ〳〵〳〵あらわるヨ姉さんも常の字ぢやア一ト
往切り黄昏をおるぶつ〳〵わへ変でも黄昏ぶひ
ぐいるう〳〵能ひよ私ゆんぞハ久〳〵ぶりでまあ
でチョイと迚さ切りで二度と淫意ぐ嗚しも酒
あひで福で氣と探の八重にらまらあひと血様
ぢやア何〳〵も思とあひのかと来ふと意替た〳〵


清之進ゝ拙
拙者
音信て
本百日ハ
ちかふの
時ごろか



あるよ延へ〳〵家業たく〳〵あるくらゐ
あらゝ嬢のい
ゑんぐ思ひなひのぐよ私の常さんぢゃア家業ぐ
ら濡ゝり日ふハ歳ゝびまゝらゐ知まゐひやうぐ
つゝ結髪ゆゃア仕ゝゝぐあい和ぐゝ意地アふ嬢
て掛るとおまへの指ゐ色程家ハ死るゝも生る
ゝも傷をに為るぐ能ひおいゝハ知ゝゐいまゝ
激ゝゝゝ常さんも居さんざゝ能いか藏に人の
娘を逃せゝ意ゝぐ能ひ男ゝ云ふ者い四まに

意の知色ゝひ指ぐゝ意毎アも私ゝ一所に始家か
ら可愛いぢゃアひらわへ〳〵姉さん堪忍ゝ受利
に意隨るから受けゝゝッても受け切まられぬく
あるゝ結ひを半に意ゝお洒ぐ丈酒ぐ丈覚
繻乃うへゝ一杯あゞわゝきまつゝと云ひかゝぐら
延ゝ祝の繻のうへを拭ふく市ゝ意仕を為る
〳〵河ぐゝそんあに蓄中にある指ゝ為へ〳〵小霧
さん嫌に酒ません繻邪の吐にかゝると皆指ゝ笑

わるよりの代り是からお嬢のを森脱くくゐる
すぐ受け切りとおやう エー変ら学春宣ぐ
結ッて居るとごうだつさ〻那跡の変り〻ゞ続き
だよ〳〵ホ〻円朝の咄〻ぢやァあひゞ甘ひ変で跡を
咄咄とおやうう延へいやぢよ よくお咄〻自分の
怠惰の癖よ大層溜〻て居るぢやァかひう花がお
嬢ハ威んさ是まで男の半で浮出さまて咄〻を
少かいよ〳〵それハ姉さん可愛さうぢよ今まで

浮氣ごろう廓遊の外ぢ男の例へ寄つて見え
もひのぢ初を延へ変ぢやァまぢ始めの初初ぐ
揺見さんもまく喰まべ誰ハ七十五日居ぢが出
まるとえふあらふ〳〵面白姉さんぢそんあふ男を
んぢやァありませんよ親の母ぢと思つて
何さう云つく男のでハ母れよ家に人に浮出を
を少ひ半ぢ初んと優てまるのを思くお間でか
ひよ〳〵ハ〳〵と種くと有難ふ最戯後かく〻の高尾く

ちやうわへ延へサア續きを聞うらおやしかへモウやつ
と根岸の隠に移つて来さよ大変分たがぢもん
ざかう私の呑ぐ居る隣の間にお客ゞこ人だろ
うかうら山人ち何ぐらうと考ふこと壹個ハ お客
の見物を見こやうで壹個ハ 俳個の家色とでも
云ふ風俗サ延へ成程去くこ其の見物の面影ゞ見
花さんか生写しとでも云ふのうへマア驚ひうら少
てお在で打角去角でちやうと考ふこと交ビッ西す
うら迎るわへ延へモウ云て居るよへ変ぐ句くッち
やア嬉ぢゃーウ

第六章

へ変うらわ隣り座敷の二個の咄そのを少てる
と思ひらしいんへうこ家色世の中の精のかも
るとうつても現生活さんの中少なのハ世の家
でやうこあいぢやアまうませんう時日までい隠分大
家といもわこ南の義見物で何つ不自由なし

に繁〻と茂のうへで今日は彼岸へ詣〻さの彩
も知るかしと云ツちやア撥を作のわく提灯さん
ふーてあり藩命〻に繁まやー〻さきまつり彩
茂福て知るもわへのと時こして出方の湯田は微
しやまやう全体冨沢所の事庭もぞうしーのぐ
市堂ィまとと足より陣り座敷の相宿りは蓮
が咲をべさかれどを冨来ひも遠ッてなくかうり
又の組たる鉦あどを組ふ書をーがさき変もの

れが見より濃り薩摩の咲ーと手作にあるもで
矢流ふ彩が始ら彩ふ咲をるゆと寝ーたるが
土提灯さんが灯屋ら方ひと云ふ者もひるさう
だが庚しくさうーさる列ぐわ人ス富ふと云ふと
番沢の義こ弟が為藩サ主人が脈つく咲里乃寝
へ来く張る留書と喜ひしーーこ等が引屋の提
合せと書ゆうし提灯の藩沢へ引ッ掛り考へ通
りふかうわへそんざから彼は名こと事年こう

たゞ〳〵涙を拭ひ流して立ちつゝ〳〵目の縁を
やア見置く物いと概略こゝを出して安と落ち〳〵のぶ
あゝ落ちるさびかなひ〳〵テモ意母さんが中〳〵の英雄
ぢやアないとませんろ〳〵窟ら義雪英雄あるもせ〳〵所
も如ざるものと為落ぶ仕組で為る日みやア〳〵も
二もなひ分さ〳〵何に〳〵ろ僕なんでいあるお
知色まつ〳〵居るから今の所と要様安命を聞
かくっちやアん情に情るざることつ〳〵居るぶんの知

われへ ちやア筆を休め探索を為るより策なしろ〳〵
私も碁の間り間出まるお学問を屋山あらんに掛
て下さひんち落目が時〳〵救助かひちやア駄表げへの
なひ分刎サ義見ざの海こざイト拵ぶざりる駄表の紙
〳〵云へめん文書とうぐ（出ちぶわ〳〵神る源のか
る時人のまろの墨でまゝる〳〵）と云つさろ裏に
感冷さア、堤花さんも好男子ぶうら身が持てわん
あるらん〳〵好男子に肖て堤花さんが一ト志ろ

繋くかうつゝ義婦ら動ちやゝ
前の事ぐろう へっし大坂へ往まんに間やゝ
で一ウン小園の事のりやゝ上人てまう隙程にか
るせ更にまゝ迄へ入つゝ極楽もりさ へ何
ひね一十二別段義で云ゝなひでも四年の和編を
憐でも覧ゝ分うやゝ へ吐ゝら光明寺
に寝入って酒ゝの費ゝわん宗西何ら大物ゝ鰯者
わまへ十二ゝ最ら往けやせん湯通嶋の如ゝ酔所

ゝ一変ぢゃ切けゝゝして山田を拵ゝと志や
うアゝ辞ゝゝ陳雑系の吐ゝの拵ゝちやゝ
那の事ゞ蔵ゝらまゝ何ぐの悲ゝゝ
初まりひと拵ゝら動ちやう寝て死ぐ長
の出例へ往るゝぶ出来るうも知れひうゝ見
暗と拵る事ゝゝゝゝ見ふうゝ山源の白
男ハ仲ゝ郭ゝ取れば遅ら福も裏ゝかり苦
に源と催ゝ延へんに今の吐ゝを吹ゝ知ゝ人

あるあ

も遊しくあるうのを〳〵さうざよ屠をるこ日ぼ
獨く悲つくるるがに一段ふかかくあるこうち悲
ふも死こくかるよ婦さん家て平異すさひか
こ伸張い同志う憂るを帰りつ当つ秋の日乃定
宝めるき財産のそれかくふ晴やらぬ悲ひ乃
獨よむく勝のころの陳ハけりやこうく嘉ぶ
さき知アの勢い彼方よ結尾花恵こ及うくへ
吟く限ふ靡く産産の憂き勇め鎮りくく

結ぼるくこを解ん色隅川墓霜を同せてい
つくなく実紙にめこる生くこの堅敷妓の性最
ふひりく宝可通こ堅くまるあ方みち同知りぶ
さき人情世態今ハ中ふ霧がかるるんやさく
氣こて能き丹妓い寓に稀ふくく寿妓こ云ふ
も名目りまく弾くこ庫縁の間ふさ人合めるか
ある流妙唱哥ぎくに世方ハ寸耶かくきを年宝
さ影の商来猫物交ぶらこでお産産のけるのを

俗ひ鼻ふ掛者ヤつゝ国屋で宮祝無家稲くらの
宮めあさ事時の姉と事ゑの本畑の種とハ云ふ
屋ゑらば拙しい作者の器機あゝんあ延わ蔵さ
んゑ事あゝ人力車夫の函輝ぞゝゝゝのへて
受れゝゝ人力車夫ゞ名ゝゝゝ過ツて来てね
潮と雪出ゝまゝゝゝと云つゝ時を宮に嫌ゝゝつ
さよ延へ房だつゝゝゝゝ夫ゝゝ分つゝのよへ初
わゝよ人力車夫ゝ云よゝ山ヤゝ宮民所のゝ事

屋の景観いさ屋の事ハ俗んに義の家ハ俗んに潮
ツてふ杉の方へ面ゝゝゝ歳りまゝゝゝ潮ゝ
出ゝてまわりまゝゝ俗ゝ杉ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ杉ゝゝ迎ゝゝ義ゝまゝゝゝ
義ゝゝ方ゝを弱ぬまゝゝゝゝゝゝ杉の
引舟通りゝゝゝ面人抜ゝ迎ゝ一丁ゝゝゝ
迎ツゝゝゝゝ杉ゝ屋の俗義と暮ゝゝ家で旦那
の行あへる所が走ゝゝゝゝゝゝゝゝ

云つる時を能ひ云つるに病身にて
小梅へ迎つて呉さるのへ
ぐいつてくれんざうら帰つて来て
梅へ手紙を出さて迎事ぐ立さへ
れへ何と云つて来さへ今に全癒が
らふひうら迎つて居るのぐ
れく緩く出しも志ゆり保養
をるゆうで移りが悪ひ他の
て居さへそれハ屋うが堤晩さんの
聖りかはの薩摩ぢうの里ぢやアひヨ柳橋で
も芳原でも人に志ぐ出さ面ぐものを今ぐ
つく自分ぐんの俳さかなひで但別さて地へ
出のけるのいを持が能くいかるまんよ芸妓の
ら小梅の通所まく出く徒ぐて出迎ぐれへ屋
しく能く何うを相言く力にかくと出ぐ
可笑ぐいまバ殘らぢそうふ方が解ひヨへア屋

ちやうわへ熟行あくッちやア氣を揉たのりで
馬鹿らしいあをへ時に お酒ぐ呑く落るやう
ぐ帰一ッ飲くくくく 極めやうぢやア為ひろへ
私ハ淳山ぐヨへ 支ぢやア為葉をへまと書くく頂
戴と志ようと延ら私ハそこ所を片寄せ葉をへ
わくく居る所へ 書ようう 無駄ハ沖り来るへヤ
蓋毎ア お酌り 大層永くうさわへ へてそ家
さ海へ 参をくくく 酌りぐけ チョイと行道の

家へ寄さのヨへ 山器おちやんの所へへ さうヨ寄ると
今日ハ夏ひ所ざお祖師さまへ お参ひとまげや
うと思つく製へさかう最お食くそふをんるか
ら百姓かくに喰さよオヤくく 小春さん 酌り掛け
から 喰 歌ざうる 吐さ身ぐ入つてお嬢ののるの
も気ぐ付う為ハ 怪ぐ 強く 拝びふ為 生でわつさ
わへ 今 好も 那 見ハ お嬢の 居をくく 事だよ ほと
三日 小 寄さんの顔を見かんと云つく 京ーぐつ

て居ると不ざつヶ情女の達つて拾さアこへオヤ是母
さんいろう新うまうこへ正午るぎうこへ婦さんと
遊んで居て隣程面白かつてヨヘ清山くお招び
ヨヘ子祝や お菓ゞもいつてらつヘッお是れヘアイヨ
是母アお菓子てもお寄おさいナヘ寄る
くつても能ひお是菓子が仕寄てけるよ
ドレヘ少寄ちやんにお張寄仕やうと私ぐ
檀乃根ようか加減夫羅の菓子を取りおー

火鉢の側へおくを延ら祝い見ものでらヘ嬉是
か是母アざ遊んナ甘菓ひ物を仕寄て呉
寄ロて居るヨヘ菓でもお目へに見せるを
おきり食寄くして能けるひかうサいらヘ
ヘ婦さん前乃出ヘいとふても出掛る方が
是ひ内へアア居おヘおわヘチヨイト機嫌さ
んを何時菓ゞ是るだらうヘ今新私が結
てる時嬉仕して居ヨヘ今も書ゞ是ひ

と云つゝかへ〳〵十二今日ハ是非お出遊さんの和
へも廻らなくッちやァあるまいかひるまをすてき
るお稽古の時ばかりハ速く廻つて方が能ひ
だらうと云つゝ居さよ〳〵家〳〵が能ひわ人
那髪結さんも甘いが別段変のもうまざ
ふ子ちやんい別段変ざとサ〳〵私も今段形
んで見やうこの〳〵ダガ曲髪の工合を那人の
方お能ひうと思へ〳〵あんざら根ガ縛らな
ひやうさうら固くまにあるのさと自分乃天窓
とかゝひらゝき指ふくゝ指ふうらゝまうお
順とおうふ家庭ざわへ〳〵ママア能ひるる〳〵素の格
子ア〳〵と開けて宮丁の金助〳〵イ今日ハふ家さん
ちゃ居でもいまをうゝア居るヨ〳〵お座敷ぶ
掛りまゝ〳〵何家ざへ〳〵今年自格でおさ陸イます
〳〵嫌ふまつさわへ〳〵弱めの字ら〳〵ア自裂らヨー